

農林水産大臣賞受賞

福祉と交流を柱とした笑顔で活気あふれるむらづくり

とくていひ えいり かつどうほうじん げん きむら
受賞者 特定非営利活動法人 やくも元気村
(北海道^{ふたみぐんやくもちょう}二海郡八雲町)

■ 地域の沿革と概要

八雲町は、北海道の南西部、^{おしま}渡島半島のほぼ中央に位置し、渡島・檜山管内で最大の広さを有している。総人口は令和2年度時点で15,826人となっている。平成17年に旧八雲町と熊石町が合併したことにより、日本国内で唯一日本海と太平洋に面している町となった。これにちなんで「^{ふたみ}二海郡」という郡名が付けられている。

豊かな自然を有しており、^{ゆうらつぷ}遊楽部川ではサケの自然産卵、天然記念物のオジロワシの飛来が確認できる。

第1図 位置図



■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

漁業・酪農・農業などの一次産業が盛んで、八雲地域は主にホタテや鮭が捕れる海産物の宝庫である。特にホタテは「耳吊り」という養殖技術を用いて、砂やゴミなどを含まず、天然貝よりも美味と言われる一品である。

農業では軟白ねぎをはじめ、もち米団地として「風の子もち」を生産している。

文化面では「木彫りの熊発祥の地」とされているほか、「北海道三大あんどん祭」の1つである「八雲山車行列」が開催される。

第1表 地区の概要

事項	内容
地区の規模	新市町村単位の集団等
地区の性格	地縁的な集団等
農家率 (内訳)	3.2% 総世帯数 7,519戸 総農家数 247戸
専業別農家数 (内訳)	主業農家 — 1種兼業農家 — 2種兼業農家 —
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 95,608ha 耕地面積 6,600ha 田 520ha 畑 6,080ha 耕地率 7% 農家一戸あたり耕地面積 26.7ha

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

特定非営利活動法人やくも元気村（以下、「やくも元気村」という）は、平成 22 年 9 月に設立された（平成 23 年 1 月に N P O 法人認証）。

やくも元気村の設立メンバーは公民館を中心に地域を元気にしようと活動していたメンバーで、公民館活動を通じて様々な町民と関わる中で、八雲町では「障がいを抱えて一般就労できない人の居場所がほとんどなく、周辺の市町村の施設に入所しな



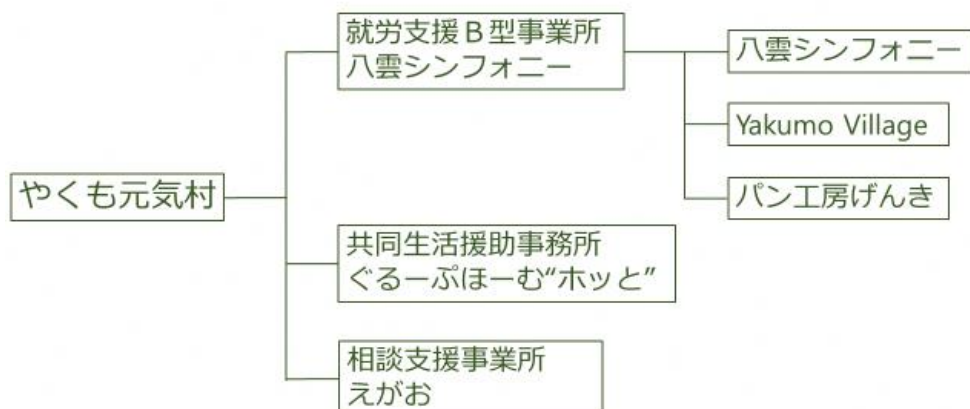
写真 1 やくも元気村設立メンバー

ければならない」、「不登校の子どもたちを支援する体制が充実していない」、「高齢者が気軽に立ち寄れる憩いの場が少ない」という声を聞いた。これを発端として、八雲町に住むお年寄りから赤ちゃんまでみんなが、「それぞれ持っている個性を大切に、お互い支えあいながら、笑顔で元気いっぱい楽しく過ごせるまち」、「それぞれの力を生かし、自分も社会の一端を担っている自信が持てるまち」、「次の世代も、その次の世代にも持続できる温かいまち」をつくるという目標を掲げ、やくも元気村を設立した。

(2) むらづくりの推進体制

本団体は役員 6 名、会員 24 名（うち農家 8 名）、事務局 2 名、職員 22 名（障がい者の就労支援（喫茶運営、農業、漁業、パン工房等））、研修生 1 名（地域資源の発掘、商品開発、P R、ツアーや体験事業の受入れ、ガイド等）で運営されている。男女比率は概ね半々で、老若男女問わず多様な人材を巻き込み、様々な人の意見を取り入れ、多くの団体と連携しながらまちづくりに積極的に取り組んでいる。

第 2 図 やくも元気村推進体制図



ア 関係団体・参加団体

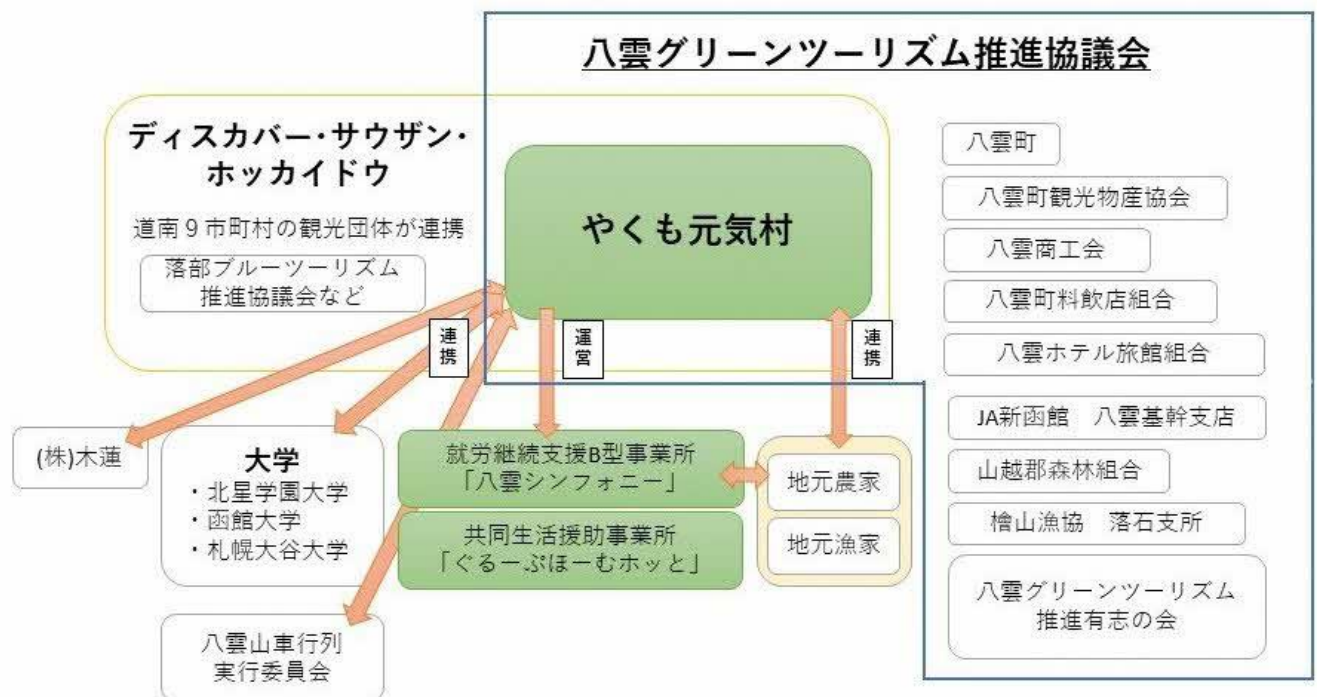
① 八雲グリーンツーリズム推進協議会

平成 30 年に設立。やくも元気村が事務局を務め、町内団体の協力を得ながらグリーンツーリズムによる地域活性化に取り組んでいる。

② ディスカバー・サウザン・ホッカイドウ

やくも元気村を事務局として、渡島・檜山管内 9 市町の観光団体と共に設立。近隣の市町村と観光客を取り合うのではなく連携して観光客が近隣を周遊できるようすること、道南の観光窓口を一本化することを目標としている。

第3図 むらづくり推進体制図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

やくも元気村は人口流出を軽減する「福祉」と、関係人口の拡大を目指す「交流」を大きな 2 本の柱としてまちづくりを実践している。更に細かく分類すると①共生型事業 ②体験観光事業 ③人材紹介事業 ④廃校活用事業 ⑤移住促進事業 ⑥教育事業 の 6 つに取り組んでおり、それらを相互に連携させることでそれぞれの事業の効率や効果を高めている。

福祉においては「障がい者だからといって引きこもるのではなくどんどん外に出て行く」をモットーに、一貫して「人と人との関わり」を大切にしており、イベントの開催・参加に積極的に取り組んでいる。

また、様々な団体に参加・連携することで八雲町から始まった活動が道南地域全体に波及しており、地域の先頭に立つ団体である。

2. 農業生産面における特徴

(1) 生産者と障がい者の支え合いによる相乗効果の形成（共生型事業）

ア 野菜の宅配・販売事業（就労継続支援B型事業所八雲シンフォニー）

月 2000 円で毎週その時期に旬な野菜をお任せで届けるサブスクリプションサービスを実施し、八雲町内外の農家から委託を受けている。売上げは初年度が約 8 万円だったが、令和 2 年度は約 140 万円と大幅に増加し、通所者の賃金や地元農家の売上げの増加、道南地域での農作物の流通促進に貢献している。



写真2 宅配用野菜の搬入

イ 農漁家への支援作業（就労継続支援B型事業所八雲シンフォニー）

農業ではネギの収穫の際の皮剥ぎや田植え、草取り、野菜の仕分けなど、漁業ではホタテの耳吊り作業や漁具の修繕作業を行っている。漁業では春から降雪前までコンスタントに作業を行うことで生産者の作業時間の軽減に貢献しているほか、農業では春の播種やかぼちゃの収穫など繁忙期や人手が足りない時の突発的な作業にも対応する。一次産業は繁忙期の人手確保が非常に難しく、人材不足に悩まされていたが、常に色々な仕事を行っている福祉団体であれば繁忙期だけの作業にも安定して対応することが可能であり、上手く結びつくことができ



写真3 漁福連携（ホタテの耳吊り）

ている。また、障がい者の雇用の重要な場にもなっており、働く場所がない障がい者と労働力がいない一次産業事業者が互いに支え合うことでwin-winの関係構築している。

(2) 体験型観光の促進（体験観光事業）

「八雲グリーンツーリズム推進協議会」の事務局として体験型観光を推進している。体験内容としては軟白ネギの収穫体験や和牛のお世話体験などがある。外国人観光客をメインターゲットとして事業を開始し、はじめは好調であったが、新型コロナウイルスの影響からターゲットを日本人にも広げていった。日本人は主に民泊型修学旅行の受入れを行っている。この事業により地元の農家・漁家と町外からの観光客との交流が増加しただけでなく、体験型観光に関する情報交換等で農家・漁家同士の交流も増え、コミュニティ活動の強化に繋がっている。

やくも元気村が作業衣服や道具の準備、現地でのガイドといったサポートをすることで受入れ負担が軽減し、農家・漁家が純粋に交流を楽しむための基盤が醸成された。

はじめは体験観光に難色を示していた生産者も、普段は当たり前に行っていた作業に対し、学生から次々に質問が飛び、素直に感心・感動する姿を見て、「こんなことに驚くのか」といった感動のキャッチボールが繰り返されている。

次回の受入れではどんな体験をさせようかといった構想を自ら練るなど、受入れに対して積極的になるとともに、自らの仕事の魅力ややりがいを改めて感じることで、生産者の仕事への意欲の向上にも繋がっている。



写真4 体験観光（ネギの収穫）

（３）一次産業へ労働力をコーディネート（人材紹介事業）

八雲町の大自然に囲まれた「普段の生活」は、都会の人にとっては「非日常」であるということに着目し、田舎の働き手がいらない一次産業と都会の若者をマッチングさせ、普段とは違う体験を提供している。令和３年度にはコロナ禍にも関わらず 20 名から働きたいという応募があり、採用者 5 名が訪れている。

フリーランスで働く人やインターンで来町した長期滞在者の中には、当初は 1 日数時間の農家、漁家の手伝いをしていたものの、八雲町の自然に囲まれた作業に魅了され、一日中、一週間働くことを希望する人もおり、このような人をアルバイトとして雇うことで、短期的な労働力の確保ができ、新たな交流が生まれるだけでなく貴重な労働力として八雲町の一次産業を支えている。

また、やくも元気村が運営する「特定相談支援事業所・障がい児支援事業所『えがお』」に動物好きの引きこもりの若者が相談に来た際、NPO 会員の酪農家に紹介したところ、そのまま酪農家に就職。順調に仕事を続け、牧場が大規模農場になってからも社員として働き続けている。このように、やくも元気村の紹介によって若者の就職先の斡旋と、農場の担い手育成に貢献している。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 新たな地域活動の拠点を整備（廃校活用事業）

ア カフェ兼ゲストハウス「SENTO」の整備

廃業後の銭湯をリノベーションし、短期から中期の滞在ができるゲストハウス SENTO を整備。当時の浴槽をそのまま残したユニークな内装となっている。野菜の直売所や、地場産品を使用したカフェを併設し、八雲町の食材を PR している。

宿泊施設としての役割のほか、農泊観光拠点としてのワンストップ窓口、地域観光情報の発信拠点、体験プログラムを受け入れる生産者と観光客が夕食等を通じて交流する場、イベントの会場としての役割を兼ね備え、宿泊者以外にも町民と観光客の交流や、町民同士の新たな交流も生まれている。SENTO で開催するイベントは特に盛んで、宿泊者と町民が「オモシロイ」と感じる様々な企画を立ち上げ、その企画がさらに町外から人を呼び込み、そこに来町した人がまた新たな企画を立ち上げていく「オモシロイ」の循環が生まれている。宿泊者数は年々増加し、令和3年では実宿泊者数が680人、延べ宿泊者数が1028人となっており、SENTOを訪れた人の多くは魅力を感じてリピーターとなっている。このようにSENTOを拠点として町に人が来る仕組みができている。



写真5 SENTOの内装

イ 廃校をリノベーションし交流拠点を整備

町内の廃校（平成23年廃校）をリノベーションし、キャンプ場・レンタルスペースとして蘇らせた。リノベーション後の校舎は、アイヌ語で牛を意味する「ペコ」と、風を意味する「レラ」を組み合わせ「ペコレラ学舎」と名付けられた。キャンプ場や内装の整備はSNSを中心に参加を呼びかけ、全国から約60人のボランティアが最短1日から2ヶ月程度八雲町に滞在し、リノベーションを行った。現在は、やくも元気村の赤井義大さん、八雲町地域おこし協力隊の山本里咲さん、藤谷修平さんの3人が中心となって運営している。主にキャンプ場としての利用のほか、コワーキングスペースやイベントの会場としても利用されている。今後はワーケーションでの利用を増やし、地元の人と町外の人との交流促進を目指している。

（２）移住・定住の促進（移住関係事業）

八雲町は、少子高齢化が進み、町の人口の維持が課題であるため、移住・定住を推進している。やくも元気村はまず「観光以上、移住未満」の来町者を増やすため、住居と食事のサポート付きのボランティア募集や、SENTOでイベントなどを実施することにより定期的に町に人が入る仕組みづくりを確立した。実際に「観光以上、移住未満」の中から10人が町民になるなど、地域維持に貢献している。



写真6 一週間酪農家で働いた男性

（３）学びの場の創出（教育事業）

外から人材を連れてくるだけでなく、地域の人材を育てなければいつか限界が来てしまうと考え、「やくもの寺子屋」をSENTOで行っている。ただ勉強を教えるのではなく、生徒自らがやりたいことを見つけ計画を立てて実行する。「あしたの寺小屋ネットワーク」を利用した日本全国の同世代の生徒との交流のほか、ゲストハウス利用者や地元民を講師とした授業等、中山間地域にしながらに幅広い価値観に触れ自らの将来について考える機会を提供している。